

稽古

漢字にすると本来の意味が解ることがあります。「ありがと



う」は「有難う」で、有ることが難しいということ。今

回ご紹介の「けいこ」は漢字で「稽古」と書きます。「稽」は考えるという意味です。「稽古」とは、物事を検討し、過去の出来事に学ぶことです。

曹洞宗の道元禪師は、稽古をするにしても、古くを考えるだけではなく、それを今の自分に生かすように稽古をしなければ画にかいた餅であると記されています。

「悲しいかな、大宋国の在家も出家も誰ひとりとして龍樹のことは解せず、提婆のことは通ずる者もなかった。ましてやかの尊者の姿に身をみもって迫るものはなかった。円月はくらく、満月は欠けていたのである。

それも古を学ぶことを疎かにし、古を慕う心のいたらぬがためである。先人も後輩も、せっかく真の姿に遇って、画餅を味わうの愚をおかしてはなるまい。」



こどもの「おけいこ」だけではありません。大人だからこそ稽古の意味を今一度考えましょう。

輪廻は、人間が累々走を止める装置

こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

稽首

今回の「稽首」自体は身近な仏教用語ではありませんが、土下座の形の由来の一説

でありますのでご紹介させていただきます。

古代インドでは、尊い方に敬意を表す形として、額を地面につける形があります。頭、両手、両膝を付けることから五体投地とも言われます。さらに、相手の足に自分の額を当てると最敬礼の形となります。自分の体で一番位置の高い頭を、相手の体で一番低い位置にある足に当てることで、帰依を表すのです。お経の中では、仏足頂礼とか稽首作礼と出てきます。

日本の土下座の形は、ここから発生したという説もあります。が、謝罪という意味で用いられるのは、比較的最近で大正時代の頃からだそうです。

ここを理解すると、仏様の足が何故偏平足なのかを理解できます。仏像を見る機会があれば是非ご覧ください。偏平足です。なぜか、お経の中では、仏様の体が非常に大きく表現されていることがあります。もし土踏まずがあると、その位置にいる人は仏足に触ることができないのです。誰もが触れるようにとの慈悲の心が形となり偏平足となりました。

